

《コラム》

チューリング賞に関して感ずること



喜連川優 (国立情報学研究所／東京大学)

2013年 ACM フェローを授与された際にサンフランシスコで開催された ACM の式典に出向いた。この式典ではかなりたくさんの賞が次から次へと授与されるが、その中で最も立派な賞がチューリング賞であることは言うまでもない。年によって異なるのかもしれないがその年は Intel と Google がスポンサーだったようで、お祝いの言葉が Intel 社から述べられたことを記憶している。米国の経済成長の 25% は IT によるという米国政府の見解が出ているが、大手企業がしっかりとこの歴史ある IT の頂点となる賞を支えている。ACM には企業名を冠した賞もちろんある。チューリング賞においてはスポンサーが自社の名前を出さないところがなんとも奥ゆかしい。日本においても同様の構図を本会がプロデュースできないものかと感ずる。筆者が会長時代、種々案件であまりに忙しくそこまで手が出なかったことが残念である。

もう 1 つチューリング賞について記憶することについて述べる。筆者はデータベースを研究領域とするが、この領域においては近年では、1998 年に Jim Gray 氏が、2014 年に Mike Stonebraker 氏が受賞された。受賞講演の場として好きな国際会議を選択でき、ACM の主催には限らないようである。J. Gray 氏は IEEE ICDE で、M. Stonebraker 氏は VLDB (International Conference on Very Large Data Bases) で講演をしたが、筆者はお二人のファンでもあり両名の受賞講演に参加した。チューリン

グ賞は「理論研究」が多いと感ずられる賞であるが、トランザクション処理システムにおいて多大な貢献をした J. Gray 氏が受賞した際には、理論ではなく、「システム」の研究で初めての受賞者とデータベース業界では話題となった。DEC, Tandem, IBM, Microsoft を始め多くの企業において実システムにおける豊かな経験を有する同氏の研究のテイストはきわめて華麗で、常に深い味がある。いかなる障害からも回復を可能とするトランザクションというフレームワークは今日の IT システムに非常に大きなインパクトを与えたと言える。ずいぶん前に彼を訪問した際、議論を始めようとする次から次と電話がかかり、現場に密着している迫力を感じたが、電話の線をひっこ抜いて、若い日本人に向かって、「さあ、これからは君の時間だ。話そう！」と言ってくださった温もりのある顔は今でも忘れられない。

加えて、M. Stonebraker 氏もユニークであった。同氏の受賞講演の際、その友人が、チューリング賞に最も近い研究のスタイルは 1 つのことを深く長く掘り下げることであるが、M. Stonebraker 氏は関係データベースに関してとてもたくさんの要素技術を生み出し、このスタイルのチューリング賞は初めてだと祝辞を述べた。POSTGRES (後に PostgreSQL) は最初の大規模オープンソース データベースソフトウェアである。オープンソースという言葉が生み出される以前に巨大なコードベースを大学が構築しオープンにした。多様な機能を次々と組み込

みながら育てたため、必然的に色々な要素技術を作らざるを得なかったとも言える。M. Stonebraker氏はJ. Gray氏の優しさとは異なり、日米摩擦まっさかりの80年代に最初に会ったときは相手にしてくれなかったが、晩年になり、仲良く話をしてくださるようになった。POSTGRESは非常に多くのユーザを生みその貢献は計り知れない。

受賞者の貢献をどのように考えるかはほかの大きな賞でも多様かつ深い議論があり大変な作業である。チューリング賞においても、深淵な議論がなされているものと想定される。ITなる研究領域は進化が著しく激しく、賞の基準の設定は悩ましいところではないかと推察される。一般に理論研究は従前の水準との差分が明快であるのに対し、システムに関連する研究はその貢献を明確化するのは大変難しい。チューリング賞の対象領域がそのような困難を乗り越え、システム技術を評価し、しっかりと進化し続

けている点が素晴らしい。未踏領域に取り組む新しいプレイヤーにとっての憧れを生み出し続けているのである。その維持に費やされる多大な努力に頭が下がる。

本会は従前、産の会員が学のそれに比べてずっと多かったが、最近では、逆転している。産と学がより有機的に共創すべく、過去の研究の貢献の本質を議論することは実は互いの立場を理解するうえで非常に有益と感じる。チューリング賞に学ぶところはきわめて大きい。

(2017年9月5日受付)

喜連川優 (正会員) kitsure@tkl.iis.u-tokyo.ac.jp

1983年東大工学系研究科情報工学博士課程卒業、工学博士。1984より東京大学生産技術研究所に務める。現在教授。2012年より国立情報学研究所所長、本会第27代会長。

